

特別講演 1

「保険診療が可能になったカプセル内視鏡

～小腸疾患の診断も含めて～」

大阪医科大学第二内科（消化器内科）教授

樋口 和秀 先生

ここ数年、消化管診療は、いろいろな意味でめまぐるしく進化を遂げていると実感できる。その一つは、カプセル内視鏡・ダブルバルーン小腸内視鏡の開発により、これまで、暗黒の世界と称されていた小腸を消化管の内腔からアプローチできるようになったことである。カプセル内視鏡は「内服薬のように口から飲み込まれたあと、消化管を通過しながらその内部を撮影することができるカプセル型の小型内視鏡」で、イスラエルで開発され、2000年にNature誌上で発表された。2001年に欧米で臨床応用され、小腸の検査のファーストチョイスと位置づけられている。2003年にやっと日本に導入され、臨床試験が行われた。2007年10月に保険適応になり、イスラエルのGiven社のものが保険で使用可能となった。現時点での小腸用カプセル内視鏡の適応は、原因不明の消化管出血である。もうひとつの小腸検索のツールであるダブルバルーン小腸内視鏡とともに、これら二つの内視鏡を用いることにより、全消化管の観察および治療が可能になった。両内視鏡が普及することにより、これまで明確にされていない小腸疾患がより容易により詳細に解明され、治療されていくと期待される。